

現在、評者は、地理学を離れ、隣接分野である社会工学という学問分野で主に都市環境計画を研究しているが、他の研究分野に比べ、都市地理学を中心とした従来の地理学においては、都市整備上の有効な情報提供を行った研究成果があまり発表されてこなかったことを残念に思っている。都市整備実務に長年携わり、都市整備研究の豊富な蓄積をもつ著者の研究成果が結集した本書が地理学の発展を目指す研究者の助けとなり、地理学が社会に貢献しうる学問分野であることが証明できるような研究成果が今後発表されることを期待したい。

(山本佳世子)

アリソン・マレー著

熊谷圭知・内藤耕・葉倩瑋訳

『ノーマネー、ノーハネー

—ジャカルタの女露天商と売春婦たち—

木犀社 1994年 283p.

「インテリどもはいつも、自分たちが本物の生活をとらえそこなっているのではないかと不安なのだ。本物の生活とは、ファンキーな黒人や、プロボクサーや、荒牛乗りや、港の人夫や、ブドウ摘みの労働者や、密入国者といった連中のものなのだ」というトム・ウルフの引用から本書は始まる。著者アリソン・マレー氏は、オーストラリアの地理学者で、「何か本物の生活」を探究しようとかつて旅したことのあるインドネシアへやってきた。1980年代前半から後半にかけて、ジャカルタにおいて調査を重ね、カンボン（都市の下層階級地域）における特に女露天商と売春婦たちの日常生活世界を描写し、それをインドネシアの国家的文脈の中で捉えようとしている。

マレー氏の興味関心は、カンボンの日常生活および生き残りとして、「大首都」文化や支配エリート像との間にある矛盾にある。そして都市の変容を底辺から見ることで、その矛盾を読み解いていくことが本書の目的であった。研究対象はカンボンで小宇宙を成している露天商にとどまらず、売春婦にまで及んでいる。なぜなら、資本主義的発展の浸透がもたらした消費主義文化によって、カンボンの外に目を向けつつある若い女たち、売春婦

たちもまた、下層階級に位置付けられているからである。

本書は8章から成っている。前2章では、マクロな視点からカンボンを取り巻く社会的環境について述べられている。続く5章でカンボンで生きる人たちの日常生活が、エスノグラフィックに記述されている。終章で女露天商および売春婦たちが、どのように変容する社会へ対応しているのかを分析している。専門的な研究書でありながら、題名をはじめ章題が非常にアトラクティブで、読者の興味関心が直ちに喚起されるが、研究書であるために内容が専門化され、難解に感じる側面もあるかもしれない。しかし、そこは詳しくすぎるほどの訳注がカバーしている。また、マレー氏の調査結果の部分（人々とのやりとり）はインドネシア語から英訳、さらに邦訳と2度の翻訳を経ているにも拘わらず、人々のため息までが伝わってきそうなほどビビッドに描写されている。なお、本書は社会学・地理学という、異なった専門分野からの視野にたった共訳であることが、いまひとつの特徴である。その結果、社会学に関心を抱く地理学者マレー氏の問題意識が、より鮮明に読者に伝わってくる。以下、内容を章構成に従ってかいつまんで紹介していく。

1. 真理と幻想：インドネシアにおける「真理体制」たる国民原理パンチャシラが、諸制度や神話の創出、直接的な暴力を通して社会において強制されている。たとえば、女性に対するイメージから普遍的と思われるジェンダー役割を作り出していたり、カンボンに関して作り上げたマージナルなイメージから、カンボンに社会的悪の諸相が渦巻くものとして決めつけたりしている。しかし、カンボンに住む人たちは、こうした体制とそれに関する政策には、殆ど何も関与せずに生活しているのが現状である。このことから、「真理」とは幻想であり、また隠喩であるとニーチェを引用しながら指摘している。

2. 大ジャカルタ夢物語：ジャカルタはインドネシアの強権的な国家体制の延長上にある。差異化が社会的・空間的にはっきり顕れており、カンボン地域は、極度の人口密集とインフォーマル・セクターの活動によって特徴づけられた都市空間の一部となっている。政策において、インフォーマルな職業、とりわけベチャこぎや露天商が敵視

されている。こうした政策決定者の態度に対し、それが「西欧的尺度」によるものだとマレー氏は批判する。一方、カンポンの人たちはこれらの政策とは無関係に、共同体的に結束し、(積極的に)権力と関らないというやり方で、自分たちのおかれた状況に適応していると指摘している。

3. マンガライの真理と死：1984～85年にかけて、マレー氏はマンガライのカンポンに住み込んで調査した。参与観察とインタビューから得られた結果に基づき、カンポンや市場で活動する人たちの実態を描写する。カンポンの表通りと路地裏の区分は社会的・経済的区分に対応しており、両者の交流はない。ここでいう「カンポン」の住民というのは、カンポン「コミュニティ」に密接な関わりを持つ路地裏の人々である。そして路地裏では、カンポンの外でフォーマルな仕事をする男性に対し、年配の女たちは全ての時間をカンポンで過ごすことから、路地裏そのものが「女の空間」とみなされることがある。4章で、その女たちの活動について記述されている。

4. 露天商の女たち：マンガライにおいて、食べ物販売を自営する6人の女露天商たちの日常の時空間パス、支出と収入、営業の仕方などの実態を、彼女たちのジェンダー役割の文脈に重ねて詳しく描写している。屋台は時間によって入替わったりするわけだが、カンポンコミュニティにおいて、他のインフォーマルな活動をする人たちのよりどころになっている。また屋台経営は時間的にも空間的にも融通性の高い労働形態であることから、カンポンの生き残り戦略に長けていると指摘している。

5. 生活様式としてのアナーキー：カンポン住民は、政府に頼ることなく自律的に活動しているという点において、カンポンの生活様式はアナーキーであるといえる。ここではコミュニティにおける人々の関係について記述されている。特に、ここでのインフォーマル・セクターのネットワークが、コミュニティ内での生活の需要に応えるものであることから、コミュニティ意識を高めていると指摘している。いわば自己充足的な空間が作り出されているわけだが、資本主義の浸透と同じように、国家やイデオロギーが強調されてくると、彼らのアナーキーを維持することができなくなるであろう。

6. 都市の幻滅：都市のカンポンは、「近代的」開発のもと、存続の危機に晒されている。露天商やベチャこぎの排斥によりインフォーマルな仕事をなくそうという政策（「希望に満ちた明日」作戦などという名称がついている！）、また都市のカンポンを取り壊して高層アパート群を建てようという開発の動き、これらが人々の活動の機会や場所を奪っていく。また直接そうした政策の影響を受けていなくても、ジャカルタ全体が「近代的」発展の方向に変容を遂げていることから、カンポンの住人にも意識の変化が見られるようになった。その例が、露天商の女に対する、売春婦たちの実態をもとに、7章で述べられている。

7. パンクと売春婦：南ジャカルタの代表的な夜の街、ブロックMでは夜8～9時に人々の活動が始まる。売春婦（ビントアン・ガール）たちは、旅行者相手の買春観光産業で働くのではなく、ジャカルタで本国並みの賃金水準で働く西欧人をもにすることを望んでいる。マレー氏が同居していたビントアン・ガールの家は、呪術能力を持つ人やトランス・ダンスを見せる人が出入りするパンカ地区に取り残されたカンポンにあった。加護の呪術を施してもらって神秘性をまとっている人、日本人の家事使用人をしているときに強姦されてビントアン・ガールになった人、少々精神に障害のある人、様々な人がブロックMに關っている。ただ、多くの場合、売春行為は彼女たちの合理的選択に基づいており、下層階級の女たちに経済的利益と、社会的束縛からの解放をもたらすと見ている。

8. 葬られるか、成り上がるか：以上より、些か単純化しすぎているきらいもあるが、女露天商たちと売春婦たちの資本主義発展への対応という視角からまとめられている。すなわち、個人のレベルでは露天商の活動は自律的であるが、資本主義発展のイデオロギーのもとで、彼女たちの「非資本主義的」活動ゆえに「葬られ」ようとしている。一方、自らの身体を商品化することによって、自営のブルジョアジーになろうとしている売春婦たちは、資本主義システムを利用し、その一員に「成り上がろう」としている。

マレー氏の見線は、一貫してカンポンの人たちのそれと同じ高さにあった。だからこそ、マレー氏自身がカンポンの仲間を葬送するための疾走

オートバイの列に加わったり、売春婦たちとパリへ旅行に出掛けるといった行為が自然にできるのだと思う。そういった部分には、マレー氏の研究者というよりは個としての人間のぬくもりを感じ、一方でインフォーマルな活動や売春を実態に即して考察し、政策に異議を唱えるところに研究者としての研究地域に対する真摯な姿勢が伺える。

カンボンの女たちの日々の生活には、暗澹たるものをあまり感じないが、人生の軌道が社会の底辺に敷かれていることを、そして（自らを商品化してしまう）女として生まれてきたことを宿命的なものとして無意識に受け入れている。それらは、露天商たちの「なるようになるさ」、あるいは売春婦たちの「ノーマネー、ノーハネー（愛も金しだい）」というため息ともつかない言葉に象徴されている。マレー氏の求めていた「本物の生活」は、この諦観を含めてカンボンの女たちに見いだされた。女として、人間として、等身大の人間に対する何らかの意識を喚起し、またフィールドワーカーを志すものとして、意気を高揚させられる一冊である。

（森本 泉）

杉谷 隆・平井 幸弘・松本 淳著『風景のなかの自然地理』

古今書院 1993年 144p.

自然地理学は、人文地理学を学ぶ学生の側からはとかく「難しい」と敬遠されがちな科目であると同時に、初等・中等教育においては「社会科」の範疇にあるため、どうしても人間の諸活動の土台としての「自然」を学ぶといった印象を拭き切れない面がある。加えて、私が現在接している高校生らの声の中に、自然地理学と人文地理学をはっきりと分けて好き嫌いを示す表現が多々見受けられることから、現在、地理学を学んでいる、あるいは学ぼうとしている者の間でも、どうやら自然地理学と人文地理学の乖離は大きくなっているといえるようである。そのような中で、本書は、まえがきにもあるように自然地理学の格好のテキストとして執筆されたものであるが、同時に実は自然地理学を切り口に「地理学」を語るという画期的な企画の書にもなっている。まずは、

万人に手にとってみてもらいたい。

筆者らのその意図は、「風景のなかの」というタイトルとその章構成に如実に物語られている。従来の自然地理学のテキストのスタイルである「気候」「地形」「陸水」などといった分野別の構成を脱し、読者が普段目にし、認識するレベルの「自然」である山、森、平野などを大項目に順次話が進められているので、自然地理学の専門用語を知らない初学者にも実に馴染みやすい。そしてその内容も、開発・災害・環境保全・資源利用など、自然と人間の関わり合いに重点が置かれているのが特徴になっている。例えば、一般には堅いイメージを抱きがちな第1章の「火山」では、第1節で「火山の自然」と題し、よく目にする日本のいくつかの代表的な火山の絵解きを通して火山地形を概説した後、2節の「火山の恵み」では金属資源・火成岩の歴史的な利用、火山地域の農・工業についてふれ、3節の「火山災害」につなげている。火山の解説を通じて、実は火山の存在ゆえの日本の多様性が語られていることに後から気付いてしまうところに、この本のおもしろさがある。

本書のもう一つの特徴は、その図版の多さと本文の軽妙な語り口にある。図版に関しては、何よりも偶数ページを文章、奇数ページを図とし、見開きで文章と図とが対応できるように作られているのが最大のポイントであるといえる。地理学のテキストには、自然・人文の別を問わず、どういふわけか図版が豊富なものが少ない。地理学が地図等に深く係わって発達してきた経緯があるにもかかわらず、である。まえがきには、「読者の理解を助けると同時に、地理学的なもの見方に慣れてもらう」とあるが、恐らく筆者らが想像した以上に読みやすさ・親しみやすさの点で評価は高いに違いない。しかもその図一つ一つは、『日本国勢地図帳』などのしっかりしたベースマップを元に筆者らがこつこつ描き上げたもの、あるいは既存の文献からの引用の際も、わかりやすく描き直すという一手間踏んだものになっている。赤と黒の二色刷りという企画も、ユニークでおもしろいが、この膨大な作業量には、自然に頭が下がる思いである。

本文の語り口は、一度でも実際に筆者の講義に出席したことのある方々にはおわかりのとおり